

## 南岳大廟に夜は更けて

あれからどのくらい南岳大廟(ナンユエターミヤオ)の門前街ともいえる小さな街の通りを、ああでもないこうでもない歩きまわったことだろう。確かにここは見覚えがあるという路地や堀端の道も、進んでいくとその見覚えも急に煙のようにかき消えて、あれほど確かだと思われた記憶も地崩れのように崩れて、煙のように怪しげなものになってしまう。昼間の民宿や、民宿のおばさんのことも、まるでキツネにだまされたものように、本当にあったことなのかどうかさえも分からなくなってしまふというありさまだ。

警察か商店に駆け込んで力になってもらうということも考えたのだけれども、僕は民宿の場所はもちろんのこと、その名前さえも知らないのだ。説明のしようがない。

ともかく、この小さな街の考えうる路地という路地は入ってみたし、それでも民宿を見つけたことができないのだから、今はもうどうすることもできない。もしかしたち夜の街は昼間とは印象がまったく違っていて、そのために何か大きな思い違いをしているのかもしれない。

今はまだ、午後一時過ぎ。このままここで夜を明かして、明るくなってから、もう一度民宿を捜すことにしよう。

そのように自らに言い聞かせるようにして、僕は閉ざされた南岳大廟の脇道の石門にもたれて、ナップサックから梨を取り出して、食べた。

運悪く、また雨が降り始めた。少し肌寒いのでトレーナーを着込んで、

さつきお土産物の売店で買ったビールを飲んだ。

酔いにまかせて眠ってしまおうとするのだが、石門は柱も床も石造りで、背中から尻から、しんしんと寒さは伝わってくるのだった。とても眠っていられなくなつて、柱にもたれて座る姿勢になり、膝を抱えたりするのだけれども、どうにもじつとしてられないのだった。

僕は、民宿で南岳大廟へのお参りの道具(線香や爆竹やお札やら)を法外な値段で売り付けたおばさんたちを恨んだ。あれがなかったら、ひとりカッカとして民宿とまわりの位置関係を確認することもなく訳の分からないまま南岳を登り始めるということもなかっただろうに。

※

五月一五日、つまり今朝のことだ。

廻雁賓館をチェックアウトしたあと、僕は火車站へ行き、登山と夜の宿泊のために必要なもの以外を小件寄存処に預けて、ナップサックひとつ

で汽車站へと向かった。

雨上がりの汽車站前広場は泥の海で、水たまりを避けながら、南岳行き  
のバスを捜した。衡山行き（南岳経由）のバスを見つけたので、それに乗  
って出発するのを待っていた。最初がらがらだった車内にはぼつりぼつ  
りと乗客が乗り込んでくる。

しばらく待っていると、パンの売り子が乗り込んできたので、二個一元  
のパンを買って、朝食代わりにひとつを食べた。客は農夫のような人が多  
く、登山をしようというような様子の客はほとんどいなくてちよつと不  
安だった。

ほぼ満員になった頃に、ひとりの農夫が乗り込んできた。彼は運転手と  
何やら言葉を交わしたあと、仲間とともに荷車から直径一メートルほど  
の重そうな円板状の竹籠を二つバスの屋上へと器用にかつぎ上げ、縄で  
くくり付けた。その作業が終わるのを合図にしたようにバスは出発した。  
車掌からチケットを買う（南岳まで四二元）。

バスは田舎道を走り、途中の村々で農夫たちはひとりふたりとバスを  
降り、また乗ってくる。南岳までは一時間半ほどかかっただろうか、途中  
下車しなければならぬので、南岳に者いたときにうまく分かるだろう  
かと心配だったけれども、南岳ではバスはバスターミナルに入ったので、  
すぐに分かった。

乗降口から一步を踏み出すと、群がってくるような人ばかりだった。一  
瞬、僕は誰か有名な人も乗っていて、その人を歓迎する人ばかりなのか  
と思つて、その人ばかりを通り抜けようとしたのだけれども、実は人々は  
僕にたかっているのだった。いや正しくは僕も含めた降りてくる人々み  
んなに。

たかられてるくなことはないので、僕は人だかりを無視して歩き始め  
ただのだけれども、その中のひとりのおばさんが死んでも離さないとい  
うような様子でついてくる。隣にくつついて、しつこく何か声をかけ続け  
る。しばらく聞いていると、どうやら宿の勧誘らしい。「日本人でも泊ま  
れるのか」と尋ねると、「問題ない」というように手を引いていこうとす  
るのだった。あまりの強引さに負けて、僕はついOKしてしまったのだっ  
た。（本当は南岳中腹の山荘に泊まろうと考えていたのだけれども。）

長沙から衡陽への長距離バスの途中に見かけた南岳山門を通り抜けて、  
すぐに登山路をはずれて小道を入っていく。

「南岳大廟のすぐ近くだ」

とおばさんは言いながら、さらに小道をはずれて二階建ての民家の方  
へ僕をいざなう。

土間を横切り、階段を登って、二階の部屋の鍵を開ける。部屋には空き

ベッドが五つほど並んでいた。いかにも素人の民宿という感じで、殺風景な部屋だった。

「今日はあなたひとりの専用だ」

とおぼさんは言いながら、部屋の鍵を渡した。宿泊料は三〇元。

おぼさんが領収書を切っていると、どこからついてきたのか、二人のやり取りをうかがっていた女性が「次は、私の出番だ」とでもいうように顔を突き出して、何事か僕にたたみかけるように言葉を投げる。何のことかよくは分からなかったけれども、ただ何かの勧誘であるということだけは分かったので、

「不要、不要」

と繰り返して答えた。

もちろん世間知らずの日本人の気弱な拒絶の言葉にたじろぐ人々ではなく、ますますはりきるようにして、彼女は手持ちのバスケットから黄色い封筒状のものや線香のようなものを取り出して、しきりに勧誘するのだった。

彼女の言葉やしぐさ、取り出した道具を見て、ようやく僕は彼女が南岳大廟へのお参りの品を売ろうとしているのだということが分かった。

「まあ、話のタネくらいにはなるだろうか」と思っ、ついOKしてしまっただった。

彼女はがぜんはりきって何事かをたたみかけるように僕に尋ねる。言葉の意味が分からないので、僕は適当に相槌を打っていた。

あとで考えて分かったことだけでも、お参りの品は黄色い封筒状のものに氏名を書き、それに線香とかろうそくとか爆竹とかを入れてひとつのセットになっていて、願い事ごとくそのセットをつくるのだ。おまけにお参りをする場所は四カ所ほどあって、そのすべてに対して願い事セットをつくるのだ。

意味の分からない言葉に相槌を打っていた僕は、すべての願い事（無病とか長寿とか家内安全とか…）をお願いするということになってしまっていたのだった。

いつのまにやって来たのか同業者らしい数人の女たちは、彼女の指図に従って、まるで内職でもするように、ある者は封筒に僕の氏名を書き、ある者はそれに線香や爆竹を入れ、ある者はそれを束ねて、というように作業を始めた。またたくまに何十個という願い事セットができあがっていくのだった。

それを見ていると、僕はしだいに怖くなってきて、

「いったいいくらかかるのか」

と尋ねるのだけれども、

「お金のことなんか言ったらバチが当るよ」

とてもいうように、いったん作業を始めた女たちは取り合わない。

やがて作業が一段落して、ひとりの女が会計を書いて見せた。

なんと合計、二二〇元！

僕はびっくりしてしまつて、

「我没有錢」

と言いながら、財布を見せ、ポケットの人民幣を取り出して、見せた。

実は人民幣の大きい額の札は別に持っていたのだけれども、それは隠していた。何にも分らない外国人の旅行者に、言葉も分らないままに、ちよつとひどいではないか、と思つたからだ。

それにしてもすでに出来上がつてしまつた願ひ事セットをどうすることもできないし、どうしたらいいのか困つたような様子を見せる女の人たちに「お金がない」の一点張りで押し通すこともできないので、一計を案じて、僕は一〇〇元のFEC札を出したのだった。

僕の方ではFECも人民幣も一〇〇元は一〇〇元でそんなに変わりはないし、彼女たちにしてみればFECは貴重なものだから、闇レートでもとても二一〇元にはならないとしても、訳の分からない外国人のことだから、そこは少しくらいまけてくれてもいいだろう。

女たちにFECの一〇〇元札を渡すと、

「外幣（ワイフエイ）を見るのは初めてだ」

というようにワイワイ、ガヤガヤ、札をまわしながら賑やかに言葉を発するのだった。

そのようにして、この件は落着いたのだけれども、僕はどうにもおさまらないのだった。

言葉の分らない人間に対して、あまりにも常識はずれだと思われる商売をする女にも腹が立ったし、言葉が分からないながらも、OKならOK、ダメならダメときちんとけじめをつけた応対ができずに状況に流されてしまう自分にも腹が立った。

「昼ごはんは食べないのか」という民宿の主人の声も振り切つて、腹立ちにまかせるようにして登山道をずんずん進んでいったのだった。

ちなみに出来上がった願ひ事セットはスーパの大袋のような袋に詰めて、二袋分もあつた。

南岳衡山は海拔二二九〇メートル。かつて五岳信仰のひとつに数えられた名山だ。道家、儒家、仏教徒など、様々な宗派の信仰者たちが修業の場所として南岳のあちらこちらに住みついた。

唐の末期には禪の波がこの南岳にも押し寄せて、曹洞宗生みの親、石頭

希遷もその修業の地としてこの南岳を選んだ。

登山路をたどっていくと、南岳大廟の裏口あたりまでは様々なお土産物の露店が軒を並べていた。南岳衡山の地図があったので、それを買って（一元）、入山料五元を支払って、いよいよ山道へと入っていく。

ときおり登山バスが追い越していく。登山バスは頂上、祝融峰まで徒歩一時間弱のところまで往復しているのだ。

所々に開墾された水田には牛が放し飼いにされ、ゆったりと草をはんでいた。水田の付近には中国風の農家のたたずまい。静かな農村風景を突き破るようにして、登山バスのエンジン音がとどろく。

途中、忠烈祠を通り抜け、中腹半山亭までは二時間くらいかかった。半山亭から上は車道のバイパスに石階段の登山路が通じていて、次々に通り抜けていく登山バスに気を使う心配はなくなったのだけれども、登山に慣れていない身にはどこまでも続く石階段はつらいのだった。

登山客は高校生くらいのグループやカップルたち。スカートをはいた女性の登山者もいて、山自体は手軽な山なのだけれども、石階段はつらいのだ。登っては息をつき、煙草を吸ってひと休み、再び歩き始める。

時刻は午後三時くらいだった。

頂上、祝融峰まではまだはるか。疲れてきたし、帰りが暗くなってしまったう心配があったので、しだいに弱気になってきた。ときおり小雨がちらつき、薄い霧がかかっていた。

帰りのことを考えると、頂上まで行くのは無理かも知れない、と思った。暗くなって山の中で迷子になってしまったら、いかに手軽な山とはいえず、笑い話ではすまされなくなってしまう。

とにかく祝融峰の手前一時間弱のところにある南天門までは行ってみて、そこからどうするかは着いてから決めようと思った。

途中、いくつかの寺の前を通って、最後の石階段を息を切らしながら登りきると、ようやく南天門。石造りの大きな門がそびえていて、振り返ると、突然開けた視界には濃い霧が流れていた。

石段に腰を下ろして、煙草を吸っていると、写真屋が声をかけてきた。彼は見本の写真をいろいろと見せて、「写真を撮ってやろう」と、しきりに誘うのだった。

「これから頂上まで行っても戻れるだろうか」  
と尋ねると、

「大丈夫、大丈夫。暗くなっても一本道だから」  
と答えながら、カメラポイントに僕をいざなう。

「日本まで送ってくれるのか」  
半信半疑で確認すると、

「もちろん」  
と胸を叩いた。

「まあ、これも話のタネかな」  
と考えて、OKした。

南天門で二枚。遠景はただ白い霧ばかり。

それで終わりかと思っていると、さにあらず。彼はどんどん先に歩いて  
「来い、来い」と手招きする。

ひと休みして再び元氣も出てきたので、せっかくだからやはり頂上ま  
では行ってみようと思つて、彼とともに歩き始めた。

南天門から祝融峰までは一時間弱。途中には、獅子亭、開雲亭、聖帝殿、  
上封寺などいくつかの名所があり、カメラポイントに到着するたびに、写  
真屋は

「ここ、ここ、ここで撮ろう」  
と誘うのだった。

何回か断わり、何回かOKして写真に収まった。

ちよつと値段が心配になつて尋ねると、一枚五元だと言う。一〇枚で五  
〇元か、と僕は計算し、ちよつとセーブしなければな、と思う。

写真屋の彼は、仕事仲間や知り合いのお土産物屋の人々と出会うた  
び、

「リーペンレン、リーペンレン（日本人だ）」

とふれまわつた。カモを捉えたことがうれしいのか、得意そうに大声を  
上げて、

「さあ、行こう、行こう」  
と先へ先へと元氣に進んでいく。

やがてお土産物屋の連なる山道を通り抜けると、山頂へと抜ける門が  
あり、入場一元。

中に入っていくと『祝融峰』と朱書きされた石造の祝融殿がそびえてい  
た。そこでまた一枚。そこから巨石が大きく中空に迫り出した望月台で、  
また一枚。

祝融峰あたりは白い濃密な霧が立ちこめていて、展望台からも見える  
のはただ白い霧だけだ。すぐ近くの人影も流れる霧にかすんで、人々の話  
し声も霧に吸い込まれていくようだった。

白一色に塗り込められた世界は、いかにも信仰の山にふさわしい光景  
だったが、いかんせん写真屋は、

「もっと撮ろう、もう一枚」

とやかましいのだった。

一〇枚くらいも撮ったので「もう充分」と断わると、彼もあきらめて岩陰で計算を始めた。

計一一枚。撮影代は一枚五元なのだが、それに現像、焼き付け、送料を含めて、一〇五元なり。

「×××は要るか？」

と尋ねるので、あわてて

「不要、不要」

と答えた。これ以上、金を取られてはかなわない。

支払いをすませ、領収書を受け取って、このまま山に残るといふ彼と別れて、歩き始めた。

ひとりになって歩いてみると、やっぱり僕はムカムカしてくるのだった。民宿での出来事の直後でもあったので、近づいてくる中国人のみんなが、カモをひっかけようとしているかのように思えてくる。ちよつとでもスキを見せると、そこに食いついて、満腹になるまで離そうとはしないのだ。

ムカムカとしながら山道をずんずん下っていくと、写真屋の女性が声をかけてきた。

「何枚撮ったの？」

「一一枚」

「いくら？」

「一〇〇元」

吐き捨てるように、僕は答えた。

領収書を見ると、彼女はあきれたような顔をするのだった。

下山は約二時間半。途中、何回か休憩し、衡陽で買った梨とパンを食べた。一心に長い石特段を下り、くねくねと続く山道を歩いていると、次第に腹のムカムカも治まってきた。そんなことはなんでもないような気がしてきたのだった。

ボられて、損をしたと勘定すること。カモにされて、自損心を傷つけられること。そんなことはなんのリアリティーも持たないことのように思えてくる。

日もとつぷりと暮れた山道をひとり下っていく自分。その鼓動、その呼吸、それ以外にはリアルなものは何もない。

やがて見覚えのある農家や水田や、あいかわらずぶらぶらとしているかのような牛たちを通り過ぎて、僕は南岳大廟のそろそろ店仕舞をする露天の賑わいの中へと戻っていった。

南岳大廟付近にはお土産物などの露店が並んでいたが、午後七時も過ぎて、そろそろ店仕舞をしようとしていた。登山道を民宿の方に歩きながら、ふと見つけた露店で、煙草とビールを買った。

店のおばさんは僕が日本人だと分かるよ、

「ちよっと待ってて」

と言いつつ、店の奥から紙幣を出してきて、

「これはどこのお金？」

と尋ねた。

彼女が差し出した紙幣を見ると、英語で『Viet-Nam』と書いてあったので、

「ベトナム」

と答えるのだが、通じないのだった。仕方がないので、ナップサックからノートを取り出して、アジアの地図を書いて、ベトナムの場所を差し示しながら、教えた。

「ここがベトナムだ。ここのお金だ」

『値多美元（アメリカドルでいくら？）』

彼女はアジア地図の横に書きつけて尋ねるのだが、僕には分からない。

「我不知道（分かりません）」

二人のやり取りを聞きつけて、ちょうど店仕舞をすませた人々がどんどん集まってきた。どこから来たのかとか、どこへ行くのかとか、四方八方から質問が飛んできてる。ある者は、パスポートを上げしげと眺め（中国人はどうやら身分証を見るのが好きなようだ）、ある者は僕のノート（旅日記）を取り上げて、「日本語？」と呟きながら感心したり、僕が書いたイラストを見ては、「これは何だ？」とか「これは知ってるぞ」とか言つては、みんなを笑わせるのだった。

ひとりが露店を指差して『竹楼』とノートに記した。何の変哲もない露店だと思つていただけでも、すべてが竹で組まれた独特の造りになっているのだった。

日本人に出会ふのが珍しいのか、ある者は「オレの家へ来て、泊まっていけ」と提案したり、なかなか解放してくれない。

疲れていたし、早く宿に戻つて休みたかったけれども、離れるきっかけをつかまえることができなくて、結局小一時間ほども騒いでいただろうか。

やがて、すぐ近くで何やらケンカが始まり、みんなの注意がそちらの方へそれたのを幸いに、彼らと別れて、再び民宿の方へ歩き始めた。

乏しい明かりを頼りにして、僕は登山道を下りていった。確信をもって、小道を入っていく。それからしばらく行って、路地に入る。

「確か、このあたり…」には民宿の影も形もないのだった。微かなクエスチョンマークが頭を過ぎる。

もう一度登山路へ出て、もう一度記憶を確かめながら小道をたどり、路地へ入って：やっぱり、民宿はない。

立ち止まって、記憶をよみがえらせようとしたが、民宿を飛び出したときは頭に血が上っていたので、どうしても細かい地理が思い出せないのだった。

もう一度登山道からたどりなおす。小道に入ると、工事現場があり、建築資材が道路に積まれている。記憶をたどると、確かに工事現場を通ったという気がする。しかしそれも本当にここか、と考え直してみると、よくは分からない。僕はあせる。

いくども同じ路地に入り、そのたびに当惑とともに引き返すのだった。商店はひとつ、またひとつと扉を閉ざし、しだいに人影も少なくなっていく。

バスターミナルまで戻って、昼間の記憶をたどろうとするが、宿のおばさんにくつついて歩いていたので、記憶は確かではないのだった。

再び最初の小道へと戻る。少しでも記憶に一致する通りはここしかない。それでも、小道から入っていく路地はどれも宿には至らない。

きつねにつままれたような感じだった。

小さな街なのだから、そのうち行き当たるだろうとタカをくくついていたのだが、しだいにあきらめの気持ちが高じてくる。

ひとつひとつと街の明かりは消えて、街角にぬくもりは薄れていく。最後まで開いていたビリヤード場も扉を半分閉ざして、店仕舞の様子だった。

南岳大廟の参道には人影もとだえた。

僕は宿に戻ることをあきらめて、夜明けまでのねぐらを捜した。これも話のタネか、と自分に言い聞かせるようにして。

ただ、民宿のおばさんが心配しているだろうなと気がかりだった。山で遭難したと思って、捜索願いを出したりはしないだろうか、などと、ちょっと心配しながらねぐらを捜したのだった。

※

夜が更けていくにつれて、石門は冷えていく。

平地ではすでに初夏の陽気だったが、麓とはいえ山中の夜は冷え込み、

さつき飲んだビールの酔いも燃え落ちた消し炭のように遠ざかってしまった。山登りの疲れもあって眠たかったけれども、寒さは僕を眠らせてはくれない。どうにもがまんがでなくなつて、僕は石門のねぐらをあきらめる。

降り続く小雨を受けながら、寝静まった街をねぐらを捜してうろついた。

この雨を避けることができて、少しでもぬくもりのある所…。

廃屋があつた！　すでに屋根は取り払われていたけれども、所々に放り出された建材を避けながら入っていくと、うまい具合に屋根の一部が残っている所があり、覗いてみるとベッド状の床もあるのだつた。暗くてよくは分からなかつたので、ベッドを手探りすると、モゾモゾと動いて、何事かをどなつた。あわててその場を逃げ出したのだつた。

まるで縄張りの主に追い払われた野良犬のようだった。

肩をすぼめて歩いていると、屋台のテントをうまい具合にねぐらにしている人もいる。廃屋で眠る人や屋台のテントで眠る人。ねぐらがなくて、雨と寒さに震えている身には彼らのねぐらでさえもよだれが出るほどうらやましいのだつた。

僕は、登山道から小道を入つたところにあつた建築現場に歩いて行つた。そこならば少なくとも雨だけは避けることができるだろうと思つたのだ。

民家の建築現場は間取りの壁と屋根だけが一応できたばかりで、地面は土。真つ暗な部屋の壁にもたれて、膝を抱いた。眠たかつたけれども、寒くて眠れない。毛布か何かまとえるものはないだろうかと、建築資材を物色した。

建築資材を覆っている大きなボール紙のようなものが目についた。ボール紙をめくり上げてみると、戸板のような台にわらを敷きつめて、セメント袋が積み上げてあつた。セメント袋の脇には、辛うじて横になれるスペースがあつた。ごついボール紙をかぶつて、セメント袋と一緒に、わらの上に眠つた。

いくどか短い眠りに落ちたが、やがてあきらめなければならなかつた。朝早い人たちがたまに通りを行き交いはじめ、そこは通りからは丸見えの場所だつたからだ。

再び真つ暗な部屋に戻つて、暗闇の中で残りのパンを食べた。

暗闇の中で身をひそめるようにして、眠れないまま、五時頃、ようやく空が少し明るくなり始めたので、民宿を捜すために建築現場を出た。

昨夜と同様になかなか見つからなかつたけれども、ついに南岳山門近くから南岳大廟の方へ入っていく横道を見つけた。夜は暗くてそこに道

が伸びていることが分からなかったのだ。昨夜、ここだと思った道はまったくの思い違いだった。

登山道からの小道を見つけると、民宿はすぐに発見できた。心配したおばさんが開けておいてくれたのかもかもしれないが、入口は開いていたのでそのまま階段を上り、倒れるようにベッドに横になったのだった。

朝九時前、おばさんの声で目覚める。

顔を合わせるなり、おばさんは

「いったいどうしたの、心配したのよ！」

というように言葉を投げつける。それでも無事に帰ってきてよかったというように、半分笑いながら。

僕は身振り手振り、しどろもどろで昨夜の出来事を伝えた。

顔を洗い、たっぷりの朝ごはん（八元）。

ごはんを食べていると、宿の主人が、案内料二〇円で南岳大廟へのお参りに付き添ってやる、と言うので、OKした。大袋に二袋分満杯のお願いセットをどうしていいのかわからなかったからだ。

食事を終えて待っていると、主人はおばあさんを連れてきた。主人が案内してくれるのかと思っていたのだが、おばあさんが案内してくれるのだった。何故かは分からないが、僕は少しくれしくなつて、おばあさんとともに民宿を出たのだった。僕らとともに民宿を出たおばあさんは、あたふたとバスターミナルへ客引きにいった。

南岳大廟への参道を歩いていると、おばあさんは五センチくらいの動物の角を縦に割ったような木片を手渡しながら、何かを説明する。だいたいの感じで占いのために使うものだということは分かった。フンフンうなずきながら聞いていると、

「一元」と言う。

「まあ、これも話のタネかな」と考えて、買った。

大廟（入場二・五元）には四つのお参り場所があつて、そのひとつひとつを僕らはまわった。

お願い事セットは供えるのかと思っていたのだが、さにあらず。廟内の庭に設けられた場所で燃やすのだ。ろうそくを立て、黄色い封筒を燃やし、爆竹を鳴らす。線香に火をつけて、両手で持って、祈りながら上下に振る。殿内に入ると、祭壇の前には分厚い丸座ぶとんがずらりと並べてあり、そこに正座して、前方に額づくようにして祈る。

しばらくは躊躇していたのだが、おばあさんがしきりに勧めるので、中国人たちに混じってお祈りをした。

正座して、額ずいて、祈る。顔を上げると、おばあさんはさっきの木片

を投げるようにと、身振り以示す。言われるままに木片を投げると、ころがった木片の様子をじっと見て、おばあさんは

「不好（プーハオ、よくない）」

と言いながら、もう一度という身振りをする。

額ずいて、祈り、木片を投げる。

「不好」

もう一度。

「好、好！」

おばあさんはうれしそうに相好を崩す。

そのようにして一時間ほどかかってお参りをすませた。

帰りの参道でおばあさんはねだるように何事かを僕に告げる。言葉よりも、僕はすぐにおばあさんの態度で直感したのだった。「四カ所のお参りにつきあったから、四元ください」と言っているのだった。

「結局はすべてがお金なんだな」と思いながら、僕は五元札を差し出した。宿の主人にすでに案内料二〇元を払ってあったが、それをもちだす気はなかった。案内してくれたおばあさんへの感謝料だった。ただ感謝がお金でしか計られないことが少し残念な気がした。

五元札に対するおつりは、なかった。これも愛敬か。

知り合いの露店で世間話を始めたおばあさんに、

「謝々、再見」

と言葉を残して、僕はバスターミナルへ向かった。